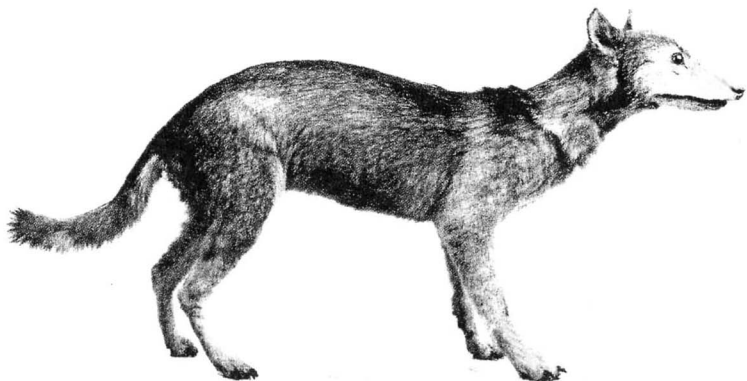


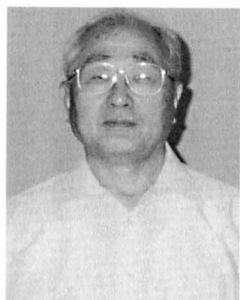
■足跡点描

ニホンオオカミこぼればなし

長谷川善和 (中47回)



オオカミ *Canis lupus* Linnaeus, 1758 イヌ科 Canidae  
出典：『日本の哺乳類』東海大学出版会



●はせがわ・よしかず  
昭和5年飯田生まれ、同24年飯田  
高松高校卒業。同30年横浜国立  
大学を卒業し、同大学の助手、  
講師を経て、国立科学博物館研  
究員、横浜国立大学教育学部教  
授を歴任して、平成7年から群  
馬県立自然史博物館館長に。専  
門は古脊椎動物学。

シーボルトが持ち帰ったオオカミ

江戸時代に来日したオランダの医師シーボルトは多くの動植物をオランダに持ち帰った。その中の動物に關しては Fauna japonica に記載されている。哺乳動物は Temminck が記載したが、それは一八四四年頃らしい。ニホンオオカミは *Canis bodopylax* と命名されたのである。短い文章であり、骨学的には充分とはいえない。この中にはオオカミとかヤマイヌという言葉も出てくる。

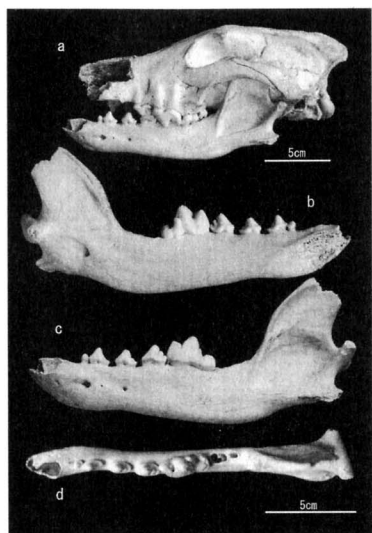
この名称がつけられた現物は、オランダ・ライデンの自然史博物館にある。一九七〇年に国立科学博物館（東京）の今泉吉典氏が行って調べたら、三点あって、一点はイヌだったが、他の二点はオオカミとして分けられるという結論になった。そのうちの一点は夏毛の剥製で、記録はオスとされているが、小原巖氏の調査でメスであ

ることがわかった。不思議なことに、乳頭があるかないか、ペニスがどうなっているのか、全然確認されていなかったのである。

## ニホンオオカミの独立性には否定的

普通、エゾオオカミ（北海道）とニホンオオカミ（本州・九州）は、単に大きさの違いと分布の違いがあるだけで近縁なものと考える人と、ニホンオオカミは別種と考える人がいる。それは歯の大きさを較べると、イヌより大きいし、エゾオオカミよりは明らかに小さい。時代的に見ると、縄文時代以降に日本にやってきたらしい。すなわち一万二、三〇〇〇年前に渡来したことになる。

私は日本の氷河期時代の哺乳動物を調べていたが、こ



最大のニホンオオカミ：頭骨 (a)、  
下顎骨 (b～d)

の時代の日本列島にはシベリア型（すなわちエゾオオカミ以上）のオオカミがいて、ニホンオオカミは出てこないことや、地質学的には一、二万年前に大陸と陸続きになった証明ができないことなどから、ニホンオオカミの独立性には否定的であった。シベリア型の大型オオカミが一万五〇〇〇年ほど前までに本州に渡来し、その後、島嶼化したために小型化したのがニホンオオカミではないかと、ずっと思っていたのである。

## 洞窟調査で入手したニホンオオカミ

一方、研究材料とした氷河期の動物は、化石として出てくるのがほとんどで、石灰岩採掘場の堅穴埋積土の中からはある。かつて鹿間時夫教授は栃木県の同じようなものを研究した時、こうした堆積土は洪水や土石流のようなアクシデントによって埋積したという考えを示していた。

私はこれに疑問を感じて、長年、日本の洞窟を探検して、その中の動物の遺骸の状態を調べていた。その結果、堅穴は自然の落とし穴で、こういう所に沢山の動物が年々墜落し、その死骸はやがて分解して、少しずつ移動し、洞窟のあちこちの堆積土の土に埋積するものだということが判ってきた。

こうした洞窟調査の中で、ニホンオオカミの遺骸もい

くつか入手していたのであるが、その一つが今泉論文の中で使われたこともあって論文にしにくかったため、長い間放置したままにしてあった。

## ニホンオオカミ最大のもの、発見

最近、温暖化と害敵（オオカミ）がいないために、シカやイノシシの繁殖が著しいことから、野生オオカミを放すという考えが出されたり、未だに日本にニホンオオカミ（あるいはヤマイヌ）が生存していると信じて熱心に探索を続ける人たちがいて、そうした人たちによって、時々オオカミ研究会が開かれている。

そんなこともあって、化石の材料を片付けておく必要があると思ひ、放置していた遺骸を調べてみたところ、なんと今まで報告されたニホンオオカミよりも大きなものがあることが判った。そのことを六月の古生物学会で報告したのがニュースになったわけである。

## 化石捏造、古代岩壁刻字の捏造

さて、こぼればなしはこの記事を読んだ八王子在住の中国人（日本に帰化している）からである。「私はこの記事のオオカミによく似た化石を持っている。大きさもほぼ同じである。関心ありや」というのである。写真も

入っていたので、早速写真についてコメントをした。これは中国甘肅省西部から出る、時代はかなり古いイヌ科動物であることを伝えた。折り返し連絡がきた。近日、前橋に行くので、その時に持って行くとのこと。つい先日持参されて、寄贈するからと言うので有難く頂戴した。このあとがおもしろいのである！

この化石の頭はほぼ自然であるが、下顎は全くちがう動物の骨を上手く継ぎ合わせて作ってあるのだ。この化石は立派な木の台の上に載っているの、素人目には全く判らないよい出来栄である。

以前、アメリカの有名な鉱物化石の展示会に、同じ地域産の化石があった。それは見たこともない動物の頭（珍種）であったことを話した。そしたら、客人からすごい話が飛び出したのである。

彼曰く、私は絵や書に関心が深く、最近、とくに拓本に凝っているんです。実はこんな話がありますよ、という。それは中国の山の中の大きな崖に実際に古代の字を刻字して、それから拓本を取って売っているのだという。それもとてつもなく大きな壁面に刻みつけられているというのである。

みんな生きるために必死なんです！ という言葉に、うなずくしかなかった。あつ、さすが！ にせもの天国、中国。